

第 3257 図



第 3258 図



第 3259 図



ほそばのおとこよもぎ

Artemisia japonica Thunb.
f. *resedifolia* Takeda

山地の草原に多い多年生の草本で、群落を作ることが屢々ある。高さ50cm許り、オトコヨモギの葉、殊に根出葉及び茎下部の葉が楔形ではなく、倒卵形の外形を示し、しかも、掌状に片寄った羽状に深裂した品種であるが、草色もまた、暗緑色の模式種と違い緑色で暗色を帯びることがない。一見して甚だ異種の感じがあるが、花部其他では区別するところがない。又別に海岸にはオトコヨモギよりも強壯剛質しかも扇状に近く末広になった葉をつけるものがある。これをハマオトコヨモギというが、要するに一種内の多型の両極端である。

しろよもぎ

Artemisia Stelleriana Bess.

青森附近から北方、オホーツク海沿岸地方の向陽の地に広く分布する多年生草本。花をつける時以外は丈低く、根出葉状に葉を群生し、全体に純白の短綿毛を密生するので美しい。葉は柄のある楕円形～倒卵形で羽状に端正に深裂し、裂片は先の円い楕円形で両側3-5個宛、平坦に展開する。盛夏に入ると高さ30cm内外に茎が伸び、複繖状に頭花を密集する。各分枝は細く一見穂状に見える。頭花は長味の鐘形で長さ6mm内外、総苞片も白い。小花は僅かに黄色。和名は全草が白いことに因る。

たかねよもぎ

Artemisia sinanensis Yabe

主に中部の高山帯で、向陽で乾燥し過ぎない斜面の礫地に生ずる多年生草本。地下浅くに太くて硬い多肉質の長い地下茎が横たわり、その上部が傾上して、その先から年々茎を斜めに立てる。高さ30-40cm、殆んど毛がない。葉は軟かく深緑色で2-3回に羽状に分裂し、裂片は線形であるためミヤマウイキョウに似るが、先端は鋭尖する。茎の上部では急に小形の葉に移行する。盛夏に入ると茎の上部に斜上した枝で狭い円錐状に多数の頭花をつける。頭花はヨモギとしては大型で半球形、径12mm内外、点頭し、総苞も亦同形で、苞片は楕円形、縁は広い膜質部がある。東北地方の飯豊山にも分布する。

よもぎな

Artemisia lactiflora Wall.

支那及びその南方に分布する多年生草本であるが、稀に日本にも栽植をみる。高さ1m位、茎は下部多少木化する。葉は卵状楕円形、先は尖り、淡緑色で1-3対の羽片に深裂し、裂片は尖り且つ細鋸歯がある。両面共に毛がない。秋晩くなってから茎の上部は円錐状に分枝し、その各枝は先端に穂状に小形の頭花をつける。頭花は長さ3mm程の鐘形で、総苞片は膜質で光沢があり、筒状花冠は白いので美しい。支那では芳香と白花とを賞用して栽植し、また民間薬にも利用しているという。

よもぎぎく

Tanacetum vulgare L.

欧州原産で多年生草本。観賞用に栽植する。北海道から北にはその一変種エゾノヨモギギク (var. *boreale* Trautv. et Mey.) の自生がある。地下に太紐様の地下茎が横走り、その頂から年々高さ70cm程の茎を立てる。全体に毛がなく、キクに似た臭気がある。葉は開出し単羽状に深裂、中軸に残った葉肉にも、羽片にも歯牙様の鋸歯がある。夏に茎頂が多数分岐をして平頂の繖房状になって黄花を開く。頭花は径5mm程の半球形で、舌状花はない。周辺の少数花が雌花である外は両全花である。和名は菊でありながら頭花に舌状花を欠く点、蓬に似ているからである。

おぐらぎく

Chrysanthemum Zawadskii Herbich
var. *campanulatum* Kitam.
(= *Ch. sibiricum* Fisch.
var. *campanulatum* Makino)

朝鮮に自生、今は栽培の多年生草本、頭花の周辺の舌状花の花冠が横に次々と癒合して筒状の心花を一周してとり巻いたチョウセンノギクの畸形が固定したものである。径3-5cm、花弁は白紅紫色、屢々膜状に下へ垂れる。筒状花もまた2cm内外に発達する。チョウセンノギクは欧州からシベリアを経て朝鮮半島にひろく分布し、日本では対馬、長崎県平戸等の数カ所にも分布をみる。向陽地を好み、高さ30cm内外、分枝して株が低く広がる。下部の葉は長柄を具えた卵形、羽状に中裂し、裂片は両側に各々2-3、頭花は径3cm内外、白花紫染、総苞外片は数個のみ線形、内片は広楕円形で多少膜質の縁がある。なお和名は発見者小倉貞子氏を記念している。

第 3260 図



第 3261 図



第 3262 図

